

# 尾張における平安末期の瓦生産

— その分布と史的背景 —

柴垣 勇 夫

尾張地方の平安時代末期の陶器生産は、猿投窯を中心にして、古代灰釉陶器が無釉の中世焼き締め陶へ転換し、いわゆる山茶椀・小皿を大量に焼成し出す時であるが、この時期の製品には、灰釉陶器からの流れをもつ広口瓶や短頸壺の類のほか、新たに三筋文壺・経筒外容器・四耳壺が登場するなど、変化に富んだ器種が同時に生産された時でもある。これらは、やがて、常滑・瀬戸という中世の代表的な窯業生産地へ引きつがれ発展していくが、こうした中世陶器の成立期の様相を示すものの一つに、瓦生産がある。

ここにとりあげようとする瓦生産は、初期中世陶と併焼されたもので、中世窯業へ転換するこの地方の、窯業生産の特徴を探る糸口となるものと考えられる。

小稿では、瓦生産窯の分布と、製作技法上の特徴をとりあげ、生産背景についての考察を加えてみたい。

## 1. 瓦陶兼業窯の分布

尾張では、白鳳期から平安初期にかけての瓦専業窯が尾張北部から名古屋台地にかけて数か所知られ、また白鳳期の須恵器窯での瓦生産も尾北窯にみられる。これらは、造瓦工人集団が、須恵器生産と同様、地方豪族の支配下におかれていたことを示している。また、奈良後期の国分寺建立に際しては、国府に属した造瓦工房によって瓦生産が行われていた。その後、平安中期から後期の瓦については、国分寺系統の瓦が広範囲の寺院址に出土していることから、国府所属の瓦工が、各地へ進出し新しい生産体制を切り開いたといわれるが、<sup>(注1)</sup> これまでに瓦窯跡等の発見はなく、その生産形態は不明である。

やがて、平安末期に至り、東山丘陵や知多半島北部において、初期山茶椀類と併焼している、いわゆる瓦陶兼業窯が出現する。これらの瓦当文様は、それまでの尾張に一般的にみられた蓮華文や唐草文とは様相を大きく異にしており、中央からの直接的技術導入があったものと考えられている。<sup>(注2)</sup>

昭和29年以降、杉崎章氏等によって、知多古窯址群の学術調査が進められると、知多北部のみならず半島各地に瓦陶兼業窯の分布することが知られるようになり、さらに名古屋市東部地域の開発が進むにつれ、名古屋大学、名古屋市教育委員会、名古屋考古学会等の手によって、東山丘陵一帯の瓦陶兼業窯も数多く存在することが明らかになってきた。

これまでの各氏の成果をもとにその分布の特徴を挙げれば、以下



図1 尾張地方瓦陶兼業窯の分布

のようである。

(1) 東山地区

東山61号窯をはじめとして、総数21基の瓦陶兼業窯が、東山・八事丘陵の主として南斜面および天白丘陵の北斜面にあって、天白川およびその支流である植田川沿いに分布する。その分布は、東西2 km、南北6 kmの範囲にわたり、主として、巴文軒丸瓦と、唐草文軒平瓦および連巴文軒平瓦がみられる。すべて山茶碗・小皿と共に焼成されているが、特に軒先瓦を出土した窯においては、片口鉢・四耳壺・経筒外容器・火舎香炉・水注など特殊品を焼成している場合が多いようである(東山61号(図2-1, 図4-1)(H-G-61), 東山101号(図2-8, 図4-8)(H-G-101), 細口下1号(図2-9)(NN-G-65), 八事裏山1-B, A号(図2-7, 図3-9.10, 図4-12)(H-G-83~85)など<sup>(注3)</sup>)。なかには、八事萱野古窯(図2-4.11, 図4-7.13.14)(H-G-80~82)のように軒先瓦専用の焼台をもつ窯<sup>(注4)</sup>もあり、量産をはかっている様子が伺える。後述のⅠ~Ⅲ期の瓦生産を行う。

(2) 吉田・社山地区

知多半島の瓦陶兼業窯は、現在、ほぼ4地区にわたって分布するが、その最北部のものがこの地区で、社山古窯3基、吉田古窯2基のほか4基の瓦陶兼業窯が知られる。このうち、最も豊富な瓦当文を出土しているのは社山古窯(図2-2, 図3-1~3, 5~8)で、軒丸瓦7種、軒平瓦6種、鬼瓦3種と極めて多種多様である。吉田古窯(図2-3, 図4-2)・権現山古窯では、別個の瓦当文がそれぞれ社山古窯と同範関係にあり、それぞれに焼成されている碗・皿に形態差があるところから、操業期のちがいと把え、工人の移動を各古窯間に考えたことがあるが<sup>(注6)</sup>、社山古窯の操業期間にはかなりの巾があり、むしろ同一範型による注文瓦の焼成をある時期に併行して行なっていたと考えるのが妥当のようである。

Ⅰ・Ⅱ期の瓦生産が主である。

(3) 大高山地区

知多半島中央部の1つで、阿久比町板山付近と大高山古窯付近の計3基がある。阿久比町板山出土資料(図2-6, 図3-11)は、地形からみて古窯出土のものと考えられるが、胎土はやや砂っぽく須恵器質に焼きあがった、尾張産としてはやや異質の瓦である。注目されるのは、八事裏山1号と同文異範の蓮華文軒丸瓦が出土していることである。また大高山古窯<sup>(注7)</sup>出土の唐草文軒平瓦(図4-9)は、2葉1対となって中心飾から左へ二転、右へ三転する中央官衛系製品の意匠<sup>(注8)</sup>に酷似するもので、中央からの意匠の強い影響が考えられる。

Ⅱ期を中心とした瓦生産があった地区である。

(4) 半田池周辺地区

特殊な文様瓦を出土する地域で、宝相華文軒丸瓦(図3-4)の同文品が3か所ほどから採集されており、他に大形品ながら巴文の縮小化した軒丸瓦(図3-12, 13)がある。軒平瓦にも宝相華文を中心飾とし左右の上下に半截花文を配した特殊品<sup>(注9)</sup>があり、神泉苑・仁和寺南院など平安京の中心部へ搬出されている。

本地区から南西へやや離れたところにある椎ノ木山古窯では、文様構成は古い様相をもちながら、

顎部および瓦当裏面の成形方法が、後述の瓦生産Ⅱ期前半にあたる三巴文軒丸瓦の出土が知られて(注10)いる。Ⅰ・Ⅱ期を中心とした瓦生産地である。

(5) 野間・奥田地区

知多半島南部の伊勢湾側に面した谷あい(注11)に築窯された地域で、下平井古窯では、11世紀代の中央官衙系瓦屋産の半截花文軒平瓦(注12)を模倣したと思われる軒平瓦が、滝谷古窯では形式化した半截花文軒平瓦(図4-10)と珠文のない巴文軒丸瓦(図2-10)が出土している。そのほか、小形化した三巴文軒丸瓦と彫りの深い宝相華唐草文軒平瓦(後述の窯ケ洞1号と同文)を出土した蛭谷古窯、退(注13)化した巴文や唐草文の軒先瓦(図2-15, 図4-18. 19)を出土した午池古窯などがある。これらは製作法でみる限り、Ⅱ～Ⅲ期の特徴をもつ。

(6) その他

① 窯ケ洞1号窯(瀬戸市菱野)(注14)

古瀬戸成立期の特徴的な製品と伴出した軒先瓦で、小型の巴文軒丸瓦(図2-12)と、同じく小型の宝相華唐草文軒平瓦(図4-15)が出土している。この軒先瓦は知多・奥田地区の蛭谷古窯(注13)と同文である。Ⅱ期後半のものと考えられる。

② 塩狭間古窯(東加茂郡足助町)(注15)

尾張の地区外であるが、特徴的な軒先瓦が出土している。三巴文軒丸瓦(図2-13)と退化した扁行唐草文軒平瓦(図4-16. 17)で、特に軒平瓦は、いわゆる完成された折り曲げ技法で、瓦当面に明瞭な布目痕を残す。Ⅱ期後半の典型である。渥美窯類似の蓮弁文壺片や水注片が伴出している。

2. 出土瓦の製作技法上からの編年

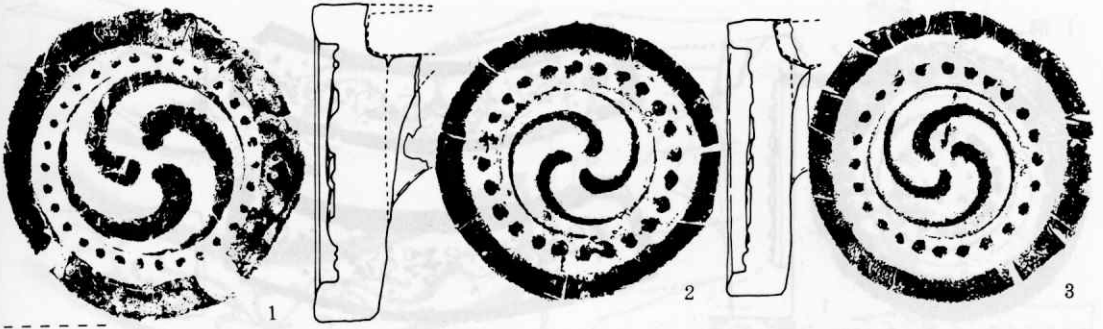
これらの瓦陶兼業窯出土の軒先瓦についてその製作工程をさぐると、表1.の様な差を大まかながら認めることができる。この差は、製作方法を問題にし、併出した椀・皿のちがいがから導き出したものであるが、製作方法の差を、明らかに示しながらも併出品には極めて類似するものがあり、一概に時間差と断定することはできない。しかし、東山地区、知多地区両地域に、共通した差が認められることから、これを技術上の新旧関係と理解し区別しようとするものである。

表 1

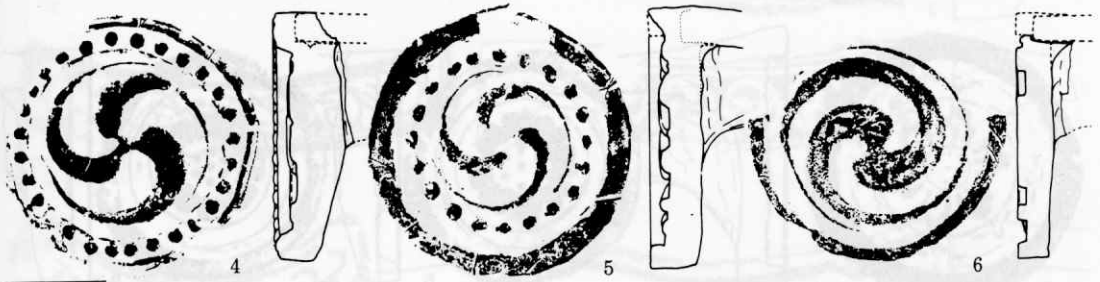
期 窯	軒 丸 瓦	軒 平 瓦
Ⅰ 期 前 半 東 山 61 号 (H-G-61) (図 2-1, 図 4-1) 社 山 Ⅰ 類 (図 2-2, 図 3-1~3) 吉 田 2 号 (図 4-2) 吉 田 1 号 (図 2-3)	径 15 cm 以上の大型品。 丸瓦接合部は、瓦当裏面に丸瓦挿入部をへらで内側から外へむけて深く抉り取っている。溝状をなさないため丸瓦はさし込みでなく、はめ込み式となる。次に内側接合部に粘土塊をおき広く指のぼしし、平坦になで成形する。外周および丸瓦挿入部以下の瓦当裏面はへら削り成形する。丸瓦の凸面は瓦当側からへら状具ないし指などで成形し、叩き目を消す。瓦当は部厚い。	瓦当左右巾 25 ~ 27 cm が目立つ。 瓦範に粘土塊をおき、おしつけながら、これにあらかじめ凸型台で作られた厚手の平瓦の広端部をおしつけ、瓦当寄りの凸面側にさらに粘土を加えながら指などでする。なでは、平瓦凸面全面におよび、叩き目を消している。瓦当上部は、巾広くへら削りし、下部顎部も同様に成形するものが多い。

期、窯	軒丸瓦	軒平瓦
<p>I 期後半 八事萱野 I 類 (図 2-4) (図 4-7) 八事裏山 I 類 (図 2-7) プラズマ研裏 (図 4-6) 瓶杵 3 号 (H-G-15) (図 2-5) 東山 53 号<sup>(注17)</sup> (H-G-53) 植田三七川原 (〃) (図 4-4) 東山 102 号<sup>(注18)</sup> (H-G-102) (図 4-5) 社山 II 類 (図 3-5~8) 半田池 濁池北 I 類 (図 3-4) 阿久比板山 I 類 (図 2-6)</p>	<p>上記と同様の手法をとるが、丸瓦挿入部は指で扶る程度で浅い。瓦当部の厚みは前半に比べ薄くなり裏面調整も前半ほど丁寧ではない。 径は 13~14 cm が多い。瓦当外周は、ヘラ仕上げのほか、なで仕上げのものもみられる。 丸瓦挿入後、凹面側の接合部への粘土つきは、瓦当裏面から大きく指なでし、そのまま指痕を残す例もある。</p>	<p>前半と同様の手法のほか、新たに平瓦折り曲げ技法が加わる。吉田 1 号では 9 点の軒平瓦のうち、1 点のみ折り曲げ技法であり、<sup>(注16)</sup>社山では、宝相華文軒平瓦のうち文様構成にやや省略のあるものに折り曲げ技法が採用されている(図 3-7)。ただし、曲げる角の凹面側に粘土の追加がみられる。 平瓦の製作には、凹型台使用のため凸面に布目が残るものもある(図 4-7)。平瓦の凸面側は、なで消しがきほどで終り、縄目叩きを残すものがみられる。瓶杵 3 号には、瓦当はないが軒平瓦の平瓦部があり、格子目叩きをみせる。</p>
<p>II 期前半 東山 101 号 (H-G-101) (図 2-8) (図 4-8) 八事裏山 B, A (II 類) (図 3-9.10) (図 4-12) 細口下 1 号 (NN-G-65) (図 2-9) 濁池北 II 類 (図 3-12.13) 滝谷 (図 2-10) (図 4-10) 下平井</p>	<p>軒丸瓦製作技法に大きな変化があらわれる。 I 期のように丸瓦挿入部を作らず、瓦範に粘土塊をおしつけ、指おし後、直接丸瓦をおしつけ、凹面側に粘土塊を追加し、接合部を補強する。接合粘土は、極めて少ない。 丸瓦を瓦当からはみ出し気味におき、瓦当径を大きくみせるものもある。顎部、瓦当裏面の成形は、なで仕上げか、指で瓦範に粘土を伸ばしたままの顎部に丸味を残したものが目につく。 この期に大形のもが登場するが、成形方法はわからない。但し、丸瓦凹面での接合用粘土の指伸ばしは大きく、瓦当裏面に指圧をよく残す。</p>	<p>2 つの作り方が併存する。ひとつは、平瓦凸面に粘土を加え瓦当を作る。瓦範に粘土塊を置き、延ばすと共に、平瓦を、瓦範の外側にはみ出して接合する形をとっているもので、瓦当外区の深い素縁部がはずれている瓦当片が目につく。もうひとつは、完成された折り曲げ技法のものである。わずかに折れ部に粘土追加がみられるが、瓦当面にも布目残り、折り曲げ技法が普及しただいたことをよく示している。全体に厚味がなくなり、小型化する。平瓦部凸面はわずかになでのみで、縄目叩きが顕著である。軒丸瓦と同様、この期に特注の大型品が登場する。</p>
<p>II 期後半 釜ヶ洞 (図 2-12) (図 4-15) 塩狭間 (図 2-13) (図 4-16.17)</p>	<p>前半と製作法はかわらない。瓦当はさらに小型化の傾向をもつ。なお、巴文様は巴頭が巾広く尾が短くなる様子がでてくる。瓦当文様も巴文一色となる。</p>	<p>折り曲げ技法がより顕著になり、瓦当に布目が明瞭に残る。折れの部分の粘土つきもなくなる。 しかし、一様に折り曲げ技法になるだけではなく、凹面に粘土をおき逆折り曲げ気味に瓦当を作るものもみられる(図 4-15)。</p>
<p>III 期 萱野 III 類 (図 2-14) 午池 (図 2-15) (図 4-18.19)</p>	<p>さらに小型化し、巴頭部も巾広く尾はさらに短くなる。丸瓦挿入方法は、II 期と同様であるが、瓦当を厚くするものと薄く簡単なものがある。供給先のちがいを示すものであろうか。</p>	<p>類例に乏しく要領を得ないが、図 4-18.19 の例は、東山-101 号窯瓦当文様を踏襲しており、時期的な隔たりはさほどないものと思われるが、平瓦広端部を直接瓦範におしつけるのみの粗雑な作りである。</p>

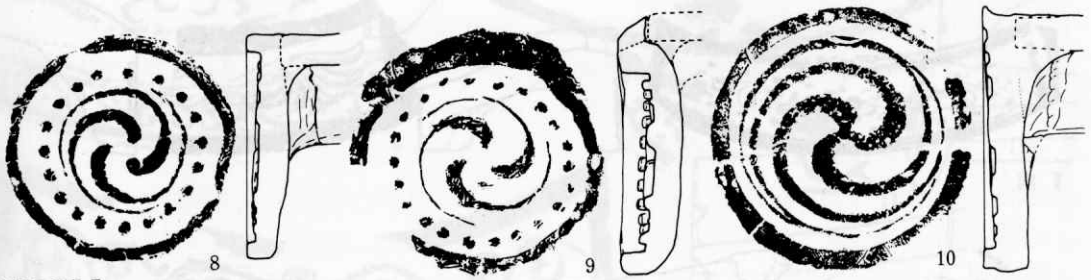
I 前



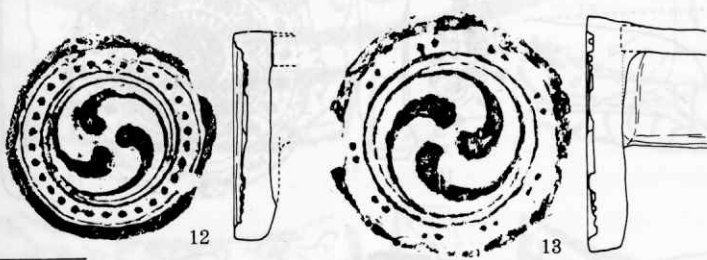
I 後



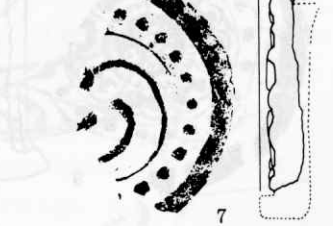
II 前



II 後



I 後



II 前

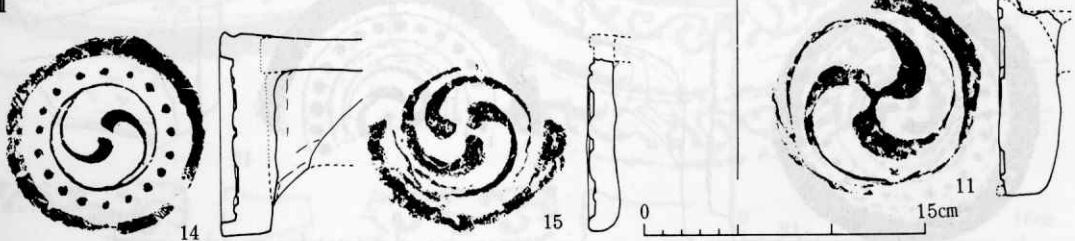


図2 巴文軒丸瓦の変遷 1.東山61号(H-G-61) 2.社山 3.吉田1号 4.11.14.八事萱野(H-G-80~82)  
5.瓶杓3号(H-G-15) 6.阿久比板山 7.八事裏山(H-G-83~85) 8.東山101(H-G-101)  
9.細口下1号(NN-G-65) 10.奥田滝谷 12.釜ヶ洞1号 13.塩狭間 15.奥田午池

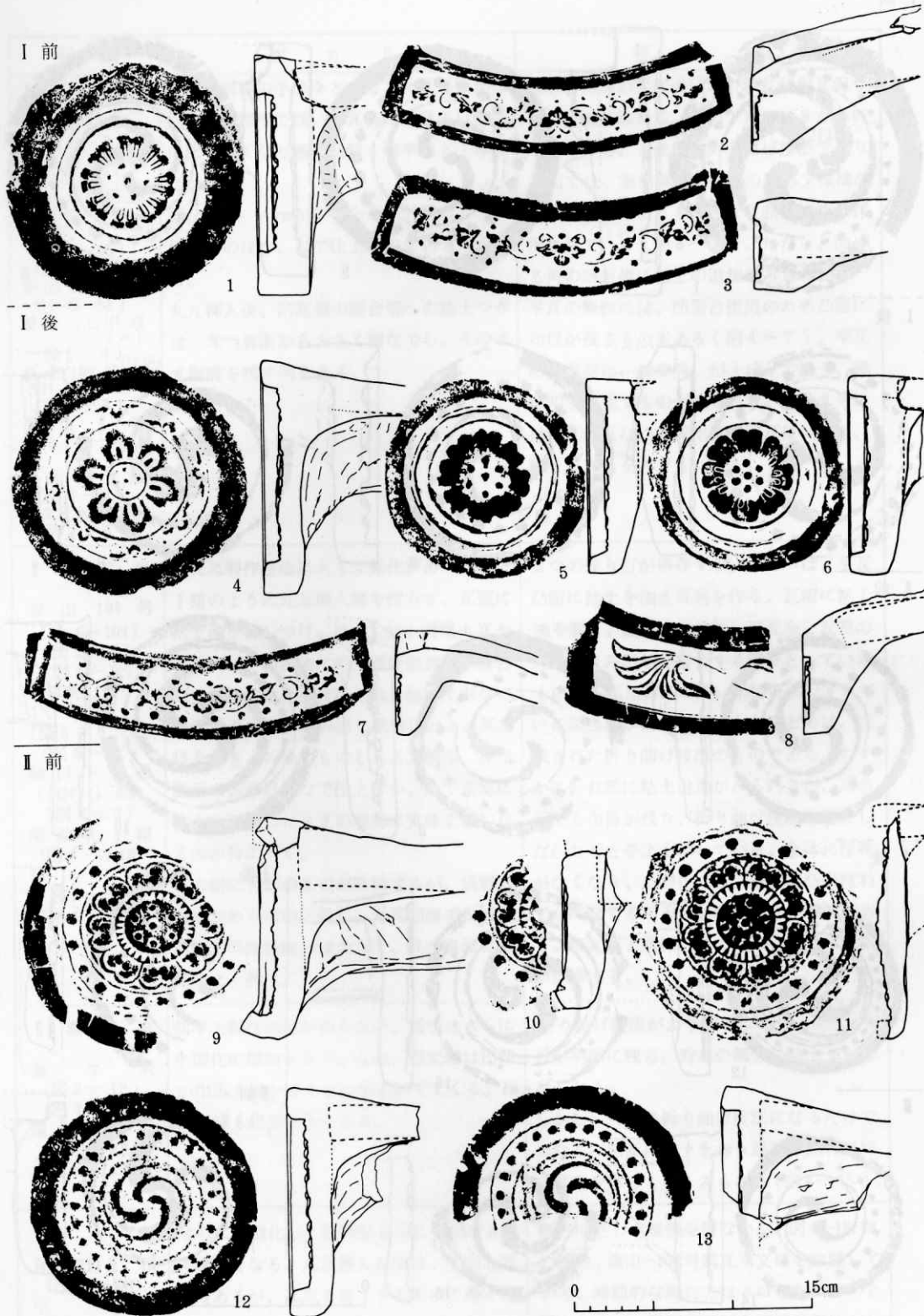


図3 蓮華文軒丸瓦, 宝相華文軒先瓦等の変遷

1~3. 5~8. 社山, 4. 12. 13. 濁池北, 9. 10. 八事裏山, 11. 阿久比板山

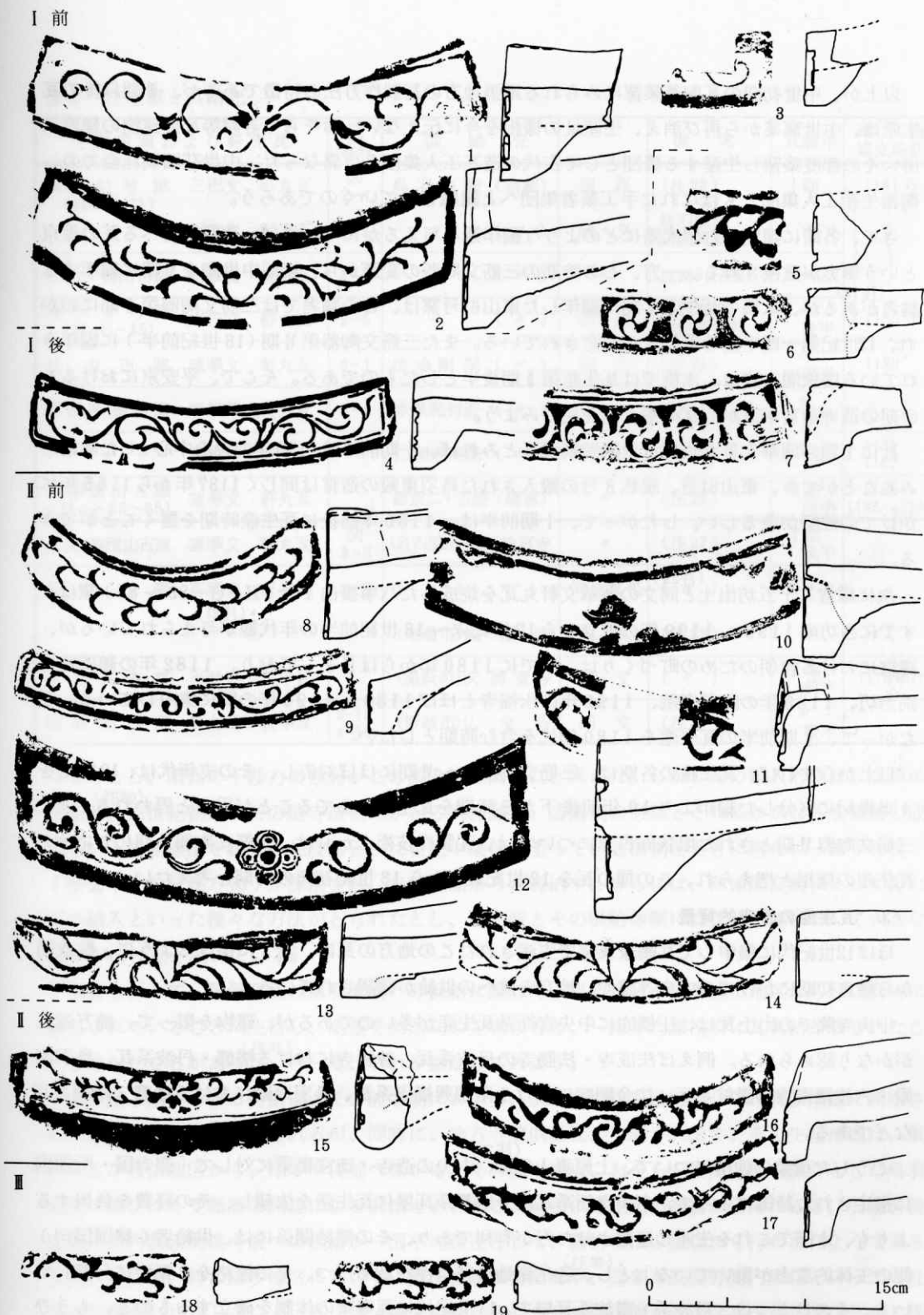


図4 唐草文軒平瓦等の変遷 1.3.東山61号(H-G-61) 2.吉田2号 4.植田三七川原(注3文献より引用)  
 5.東山102号(H-G-102) 6.プラズマ研裏 7.13.14.八事萱野 8.11.東山101号(H-G-101)  
 9.大高山5号 10.奥田滝谷 12.八事裏山 16.17.塩狭間 18.19.奥田午池

以上が、中世初期の瓦陶兼業窯にみられる尾張地方の瓦製作方法の特徴であるが、Ⅲ期以後の瓦生産は、中世窯業から再び消え、生産址の様相を今に伝えない。おそらく寺院等瓦葺建物の建設に伴いその都度築窯し生産する集団として古代の造瓦工人集団とは異なった、中世荘園制社会での、陶器生産工人集団ともはなれた手工業者集団へと組織されていくのであろう。

さて、各期に類別した型式差にどのような編年観を与えるかについては、次節に述べる瓦の進京という事実が重視される。一方、この時期の三筋文陶器の変遷から、初期中世陶をⅥ期に編年する論考<sup>(注19)</sup>があるが、本稿で瓦生産Ⅰ期に編年した東山61号窯は、この論考では三筋文陶器第Ⅱ期におかれ、12世紀第一四半期の実年代が想定されている。また三筋文陶器第Ⅶ期(13世紀前半)に編年されている塩狭間古窯は、本稿では瓦生産第Ⅱ期後半としたものである。そこで、平安京におけるこの期の造寺造宮事業から瓦の搬入期を見てみよう。

社山Ⅰ類の蓮華文軒丸瓦が法金剛院創建瓦とみれば、Ⅰ期前半は1130年前後を中心とした時期とみることができ、東山61号、瓶杵3号の搬入された鳥羽東殿の造営は同じく1137年から1155年にかけての建築が著しい。したがって、Ⅰ期前半は、1130年前後に瓦生産時期を置くことができる。

次に鎌倉二十五坊出土と同文の蓮華文軒丸瓦を焼成した八事裏山1号(H-G-83~85)窯は、すでに当坊の1190~1199年の成立から12世紀末~13世紀前半の年代観<sup>(注21)</sup>が与えられているが、鎌倉における頼朝のための町づくりは、すでに1180年からはじまっており、1182年の鶴岡宮寺別当坊、1185年の勝長寿院、1192年の永福寺とほぼ1180~1190年の間に集中している。したがって、Ⅱ期前半の瓦生産を1180年代を含む時期としたい。

以上からすれば、瓦生産の各期は、三筋文陶器Ⅱ~Ⅶ期にほぼ対応し、その実年代は、12世紀を4半世紀に区分した編年より10年前後下がる時期を瓦生産にあてることが妥当と思われる。また、三筋文陶器Ⅶ期とされた塩狭間古窯については、瓦製作技術上からは、三筋文陶器Ⅶ期に対応する瓦生産の様相と把えられ、この種の瓦を12世紀最末から13世紀初頭の時期と考えたい。

### 3. 瓦生産の歴史的背景

ほぼ12世紀代に集中して瓦陶兼業窯で生産されたこの地方の瓦は、表2に掲げるように、院政期から鎌倉初期にかけての中央寺院や、地方寺院への供給が確認されている。

中央寺院での出土瓦は、圧倒的に中央官衙系瓦生産が多いのであるが、建物を限って、地方産瓦がかなり認められる。例えば法成寺・法勝寺の丹波系瓦、尊勝寺における播磨・丹波系瓦、鳥羽南殿・六波羅密寺の讃岐系瓦、法金剛院における南都興福寺系瓦、鳥羽東殿における播磨・尾張系瓦などである。

こうした現象の理解について、上原真人氏<sup>(注29)</sup>は、中央の造寺・造宮事業に対して「造寺国・所課国に指定された諸国にとって、中央官衙系瓦屋や南都系瓦屋に瓦生産を依頼し、その経費を負担するよりも、本国でこれを生産し運搬させた方が有利であり、その需給関係には、供給者(諸国国司)側の主体的意志が働いている」とし、各生産地の独自性を認めつつ、その性格を2類型に分類している。そのひとつは、丹波系・讃岐系瓦屋で、11世紀代に瓦専門の体制を確立するものと、もうひとつは、尾張系・播磨系瓦屋に認められる11世紀後半から12世紀前半に瓦陶兼業の体制で成立す



表2 生産窯と供給先

生産古窯および軒先瓦	図 番号	供給先		備考	瓦編年	建 物 建立時期
東山61号窯 三巴文 軒丸瓦 (H-G-61)	図 2-1	鳥羽東殿(京都)	同 範	(注22)	I 期	1181年
“ 唐草文 軒平瓦	4-1	“ (“)	同 文	鳥羽離宮 研究所資料	前半	
社山・吉田古窯 唐草文 軒平瓦	4-2	“ (“)	“	(注23),(注2)	“	1155年
瓶杓3号窯 三巴文 軒丸瓦 (H-G-15)	2-5	“ (“)	同 範	鳥羽離宮 研究所資料	“ 後半	
社山古窯 蓮華文 軒丸瓦	3-1	法金剛院(“)	同 文	(注24)	“ 前半	1130
半田池周辺窯 宝相華文軒丸瓦	3-4	神泉苑付近(“)	“	(注25)	“ 後半	
“ 宝相華文軒平瓦		仁和寺南院(“)	“	(注26)	“ “	1135 1142
八事裏山A窯 蓮華文 軒丸瓦 (H-G-83~85)		鎌倉二十五坊(鎌倉)	“	(注21)	II 期 前半	1182 1185~1190
社山・権隈山古窯 蓮華文 軒丸瓦	図 3-5	(名古屋市)熱田神宮寺	“	(注27)	I 期 後半	
社山古窯 杏葉文 軒平瓦	3-8	(“) “	同文異範	(“)	“	
“ “		(東海市)観福寺	同 文	(注28)	“	
下平井古窯 半截花文軒平瓦		(美浜町)大御堂寺	同 文	(“)	II 期 前半	1170年代
塩狭間古窯 軒丸瓦 軒平瓦	2-13 4-16	(新城市)広全寺	同 文	(注5)	“ 後半	

るものとし、国衙の干渉力の強弱がこの差を生み出したと考えた。しかしその搬入形態は、次第に変質し、<sup>(注30)</sup>12世紀初頭までの造寺造宮にかかる所課国制、造国制の形態とこれにかかわる受領層の成功という国衙機構を媒介した段階と、12世紀中葉代に至って、造国制とともに新たに一国平均役(庄公平均の賦課方式)が採用され、寺荘荘園からの貢納や、さらには、在地間交易によって得た瓦の納入といった種々な方法がとられたとし、瓦生産とその供給体制に12世紀中葉において大きな変革があったと説いている。

筆者もかつて、尾張産瓦の鳥羽東殿への供給に際して、東山地区・知多社山地区からほぼ同時に搬出されていることに注目し、尾張受領国司の主導のもと、一国平均課役的に瓦供給がなされたことを述べたことがあるが、<sup>(注31)</sup>今一度、これを整理してみよう。

瓦生産I期における特徴は、その前半期において、京への供給を目的として瓦陶兼業窯で開始され、後半期に引続き進京されるが、同時に、地方寺院供給瓦が生産され出す。その生産地域は、東山および社山地区から、知多中央部へ拡がる。その前半期は、おそらく国衙機構を媒介とした鳥羽院政に結びつく受領層の調達による供給と思われる。尾張に瓦生産の端緒が切られると、引続き後半期に京内院政関連寺院への供給が一国平均課役として、量的には少量ながら行われたようである。また、この頃、特に知多地区において、熱田社領御幣田郷や、<sup>(注32)</sup>安楽寿院領野間内海荘といった寺社領が窯業地に出現している。在庁官人層をはじめとした在地領主層が知多半島一帯の窯業生産に関与することを間接的に示すものであろう。

しかし、Ⅱ期に入ると、京への瓦供給は認められなくなり、主として地方寺院を対象とした瓦生産が主体をなすようである。保元の乱後の平安宮内裏の復興事業（保元2年—1157年）には、讃岐・淡路・備前など西国を中心とした瓦供給が認められるの<sup>(注34)</sup>に対し、尾張産瓦は、12世紀代を通じて平安宮域内からの出土例が認められないという現象は、尾張の瓦生産が極めて政治的な生産品として出発を見るものの、それがやがて在地間交易品となってしまうことを示しているのかも知れない。やがて、鎌倉政権へ結びつく尾張在地領主層の一時的な姿が、鎌倉直営の造寺事業に関連して、Ⅱ期前半の末期に、特殊な大形品を焼成するという現象と結びつくものと考えられる。なお、Ⅲ期に至って、中央造寺事業の衰退や、中央官衙系瓦屋工人の地方進出の中で、尾張の窯業地での瓦生産は終えんする。これは、在地領主層の需要の減少と同時に、一方で、中央官衙系瓦屋工人の地方進出が、やがて中世的な工匠集団を形成する<sup>(注35)</sup>ことと無縁ではなく、寺院建立の際の古代とは性格を異にした瓦専業窯が、この期以後再び定着したものである。

国衙領下で、尾張国司層や、在庁官人層の積極的な介入の中で、いち早く初期中世陶を出現させた東山窯は、院政期の中央からの要求に応じた新しい器種生産にその特徴をもちつつ、院政下の強い規制のもとで、瓦生産を実施しながらも、一方で、知多半島の窯業生産の成立にも大きな影響をおよぼし発展していく。こうして、瓦生産Ⅱ期段階には、在地向け椀・皿のほか、Ⅰ期段階以上に多種多様な製品を、灰釉陶生産以来の交易ルートに乗せ、商品として各地へ供給していった。そしてⅡ期後半期には、特殊製品生産工人層は、良質陶土の産する瀬戸へ移り、さらに新たな中国製品模倣の器種を生産する。こうして、13世紀代には、中世荘園公領制の中で、自らの財政的基盤を確保しようとする荘園領主、在地領主層（地頭職を含めて）の管掌下で、瀬戸・常滑の地が、陶器生産に集中する（瓦生産を破棄した）窯業地として、その交易ルートを拡げていくのであろう。

本稿引用資料の出所は明示しなかったが、次の機関および収集家の資料による。また、以下の人々の協力によって集成し得た。記して感謝する。

名古屋大学考古学研究室・名古屋市博物館・見晴台考古資料館・東海市平洲記念館・半田市郷土資料館・岩川昇・小川仁六・岩橋栄吉。

安達厚三・井上光夫・小島一夫・荒木実・杉崎章・磯部幸男・立松彰・小川和美・宮石宗弘。

（敬称略）

注1. 大参義一「尾張出土古瓦の編年的考察」名古屋大学文学部研究論集XLⅠ所収1966。

注2. 上原真人「古代末期における瓦生産体制の変革」古代研究13・14 1978。

注3. 名古屋考古学会裏山1号窯調査団「八事裏山1号窯発掘調査報告」古代人38所収 1981。

注4. 杉崎章「尾張における行基焼古窯址出土の古瓦」『権現山古窯址』所収1965に本窯出土の古瓦が紹介されている。これを現在所蔵している名古屋市博物館に瓦専用と考えられる焼台が一括保存されている。なお、窯の記号番号は、愛知県教委「猿投西南麓古窯址群分布調査報告Ⅱ」1981による。

注5. 杉崎章ほか「社山古窯」『横須賀の遺跡』所収1956。

杉崎章ほか『権現山古窯址』白菊古文化研究所1965。

注6. 拙著『吉田第2号窯発掘調査報告書』大府市教育委員会1975。

- 注 7. 杉崎章ほか『常滑窯業誌』「資料」（『常滑市誌』別巻）1974.
- 注 8. 注 2 文献 P 45.
- 注 9. 杉崎章「常滑窯業の歴史」『常滑窯業誌』所収 1974.
- 注 10. 赤羽一郎「常滑」『世界陶磁全集 3（日本中世）』所収 1977.
- 注 11. 注 2 文献 P 4. 第 1 図 1, 2.
- 注 12. 注 7 文献 P 416. 図 1.
- 注 13. 注 7 文献 P 416. 図 7～9.
- 注 14. 宮石宗弘・山川一年ほか「釜ヶ洞第 1 号窯」『釜ヶ洞古窯址群』瀬戸市教育委員会 1978.
- 注 15. 足助町誌編集委員会『足助町塩狭間 2・3 号窯址発掘調査速報』（パンフ）1969.
- 注 16. 拙著『吉田第 1 号窯発掘調査報告書』大府町教育委員会 1969 において、出土した 9 点の軒平瓦はすべて折り曲げて作ると述べたが、観察ミスで折り曲げは No. 7. 1 点のみ。
- 注 17. 名古屋考古学会「名古屋市内窯址出土の中世瓦」古代人 38 所収 1981.
- 注 18. H-G-101 号窯上方で採集された軒平瓦で、瓦範は H-G-101 号窯でも使用されていて、図 4-11 と同文である。製作技法に大きな差がある。
- 注 19. 榎崎彰一「初期中世陶における三筋文の系譜」名古屋大学文学部研究論集 LXXIV 所収 1978.
- 注 20. 注 3 および原広志「鶴岡二十五坊跡出土の鏡瓦について」鎌倉考古 No. 11. 1982.
- 注 21. 注 3 文献
- 注 22. 杉山信三「鳥羽離宮跡」鳥羽離宮跡調査研究所 1972 および同研究所資料。
- 注 23. 中村直勝「安楽寿院」『京都府史蹟勝地調査会報告』第 6 冊 1925.
- 注 24. 中谷雅治「法金剛院境内出土の古瓦」『埋蔵文化財発掘調査概報』京都府教育委員会 1970.
- 注 25. 稲垣晋也『古代の瓦』日本の美術（至文堂）66. 1971.
- 注 26. 杉山信三『院の御所と御堂一院家建築の研究』奈良国立文化財研究所学報第 11 冊 1962.
- 注 27. 『瓦礫舎古瓦集』寛政 8 年（1796）装丁拓本集。
- 注 28. 注 4 文献
- 注 29. 注 2 文献 P 85～87.
- 注 30. 上原真人「考察」『京都大学埋蔵文化財調査報告』第 1 冊京大埋文研究センター 1978.
- 注 31. 拙著「古代窯業の発展」『古代の地方史 4 東海・東山・北陸編』所収 1978.
- 注 32. 『吾妻鏡』建久 2 年 8 月 7 日条、御幣田郷が、熱田社領として 1160 年以前に上西門院を本所としていたことを記す。この地を社山地区の所在する加木屋一帯に比定する意見が有力であり、社山古窯から法金剛院への瓦供給は、この地域が熱田社領となる段階かと推定される。
- 注 33. 注 30 文献
- 注 34. 近藤喬一「平安京古瓦概説」『平安京古瓦図録』平安博物館 1977.
- 注 35. 注 2 文献